雪結色「お兄様！」八幡「はい？」

わんぐ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、比企谷八幡の家に、【雪ノ下雪乃】【由比ヶ浜結衣】【一色いろは】がしかも、妹とか言い出すし！

比企谷八幡のシスコンラブコメは展開させる!!

目次

あの？皆さん変ですよ？ ―――― 1
夢だと言ってくれ ―――― 5
俺お兄ちゃんになります！ ―――― 9
妹ってのは、案外いいものだ
雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【前編】 ―――― 17
雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【後編】 ―――― 22
こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【前編】 ―――― 30
こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【後編】 ―――― 35

あの？皆さん変ですよ？

八幡「いやいや、はっ？何言ってんの？君たち？」
雪乃「お兄様？何か変ですよ？お具合が優れないのですか？」
俺の手を握りながら上目遣いで言った。
八幡「あのー？雪ノ下さん？何を言ってらっしゃる？あっ！わかったぞ、ドッキリだろ俺は分かるぞ昔中学頃やられたな～告白ドッキリ！うんうんそうだそうに違いないな！」
結衣「何言ってるの？お兄様？癒しが欲しいのなら、この結衣が！」
由比ヶ浜が胸を頭に押しつけてきた。
八幡「イヤイヤ、これはシャレになんねぇーってまじで！」
いろは「もう、このいろはの方が良かったのですね！そうならそうと早く言ってくれれば！」
そう言うと、一色も由比ヶ浜と一緒になって抱きついてきた。
八幡「おい！一色まで！冗談抜きでふざけるなよ！」
いろは「一色？雪乃お姉さまの事も雪ノ下って、まさか！どこの馬の骨とも知らずの

女に誑かされているのでないのでしょうね!?」
一色は、頬を膨らませながら言った。
八幡「えっ？ねぇお前らって何歳？」
この質問は、由比ヶ浜のアホさを試すための布石、由比ヶ浜なら俺と同じ１７歳と言うはず！
雪乃「えっとわたくしは、１６ですわ」
結衣「えっとわたしも１６ですよ！お兄様？結衣の歳も忘れたのですか??」
いろは「私は、１５になりますけど。お兄様変ですわよ？いろはが癒しますよ？」
八幡「いっいや大丈夫だ」
あっあれ～可笑しいな～、等々夢だったとしてもこんな夢見てたなんて恥ずかし過ぎる。まじで！
八幡「あっあのさ、ちなみにだが何年生だ？」
雪乃「わたくしと結衣は、高校1年生ですよ？お兄様？わたしにやれる事があるならなんでもしますよ？」
雪ノ下が赤らめて言った。
結衣「それはそうでしょ？お兄様？私と雪乃姉様は、双子なのだから」
いろは「いろはは、中学3年生なのです！」

八幡「そ、そうだっな！そう言えば」
いろは「そうですよ～朝の食事の用意が出来ています！行きましょう！八幡お兄様！」
八幡「おっおう」
一色が引っ張るのにそのままついて行った。というか本当に大丈夫か？俺？あとで病院いこう！そうこれは夢！多分変なＶＲＭＭＯに囚われてる！そうだそうなんだそれしかない！
いろは「お兄様！あーん。どうですか？お味は？今日は、雪乃お姉さまが作ったんですよ？」
八幡「あっあ～上手いぞ」
雪乃「そうですか！良かったです！あの、食事の後の事なんですが…私と！その、デ・お買い物行ってくださいませんか??」
雪ノ下が上目遣いで質問した。
多分ここで断ると、また怪しまれる。
特に用事は無さそうだし、まぁいいか。
八幡「おういいぞ」
雪乃「そうですか！雪乃は、嬉しいです！」

えっなんなのこの子?ツンが無くなちゃったよ!はぁまあいいか。夢だしな!
あっあと「流石お兄様です!」とか言い出したらやばい!ホント!
結衣「ずるいですわ!雪乃お姉さま!私も行きたいです!」
いろは「そっそうです!私もご一緒に行きたいです!」
八幡「いやなぁ～雪ノ下が頼んだんだ。お前らはまた後でだ!」
結衣「すっすいません。うぅ。取り乱してしまいました。雪乃お姉さまも申し訳ありません」
いろは「いろはも取り乱してしまました。ヒクヒク申し訳ありません」
雪乃「いいのよ。2人共、ねっ?泣き止んで?」
あっそうか、百合ワールドは健在か。
雪乃「八幡お兄様?変な事を考えてませんでした?」
八幡「いっいやなんでもない」
くそっ心を読むスキルは、まだ落ちてないという事か!
八幡「じゃご馳走様。美味しかったぞ」
雪乃「はい!」

夢だと言ってくれ

八幡「どっこいしょ」
俺は親父くさい掛け声と一緒に体を持ち上げた。
雪乃「あっ、あのお兄様？約束は、」
八幡「あっあ～覚えてるよ。どこに行くんだ？」
雪乃「えっと、ちかくのデパートで洋服が欲しいです！」
そう言えばここって千葉なのか？まずこの家は、どこにあってどの部屋が誰の部屋なんだ？まぁそんなことは外に出れば解決する問題だ。てか夢だとしてもなんで豪邸にすんでんだよ。俺が怖いな。
雪乃「お兄様ー！ご準備はできましたかー？」
俺の部屋は二階で、下の階段から呼び掛けてくる。
八幡「あっあ～出来たぞ～今行く」
急に扉を開けたせいだろう、扉の前にいた猫に気付かず躓き階段から真っ逆さま。
八幡「うっう～痛てー」
雪乃「お兄様！お怪我は？」

多分下にいたが1階にいたが音が響いたのだろう。雪ノ下は、心配してきてくれた。
雪乃「今すぐ、救急箱を持ってくるので、待ってて下さい！」
八幡「あっあーありがとう」
ってあれ、おかしい何故、痛みを感じる。ベットから落ちていたとしても起きるはず、というか、普通夢は現実と分からないはずだし何故ここが夢だとわかった？やばい！混乱してきた。助けて！アン○○マン～
結衣、いろは「お兄様？大丈夫ですか？」
部屋にも聞こえていたのだろう。由比ヶ浜と一色が心配しに来てくれた。
八幡「あー大したことはない」
結衣、いろは「よかった～」
雪乃「お兄様！膝と肘を擦りむいてらっしゃるじゃないですか！」
そう言うと、雪ノ下は絆創膏をぺたぺたと貼りまくった。
八幡「なんだその…サンキュー」
雪乃「いえいえ、私が急がせたのもありますし」
八幡「あのさ、まだ時間待ってもらっていいか？」
雪乃「は、はい！大丈夫です」
八幡「まぁなんだその「お兄様」っていうのやめねぇーか？」

雪乃、結衣、いろは「えっえとその呼び方を変える…と？」
八幡「あ～そうだそのなんだ、言ってくれるのは嬉しいが肩苦しいというかなんというか、」
結衣「わかりました！そのおにい？でいいかな？／／／／／」
いろは「だったら私は、メジャーなお兄ちゃんで！／／／／／」
雪乃「すいません、私は変えるつもりはありません。「お兄様」という言葉には、いろんな思いがあるので、すいません。わがままな妹で。ゥルゥル」
八幡「あっあー別に提案だから言いだぞ別に！なっ？泣くなよ」
雪乃「はいグスンあの、買い物の件なのですが、また今度にしましょう！埋め合わせしてくだされば構いませんが？どうでしょう？」
八幡「あっあ～そうしてくれると助かる」
ピンポーンとチャイムがなる。すると一色が玄関を開けてでる。
「あっ～お兄ちゃん！ここだったんだね～」
聞き覚えある声だ、いつも聞くあの声。
小町「どしたの？お兄ちゃん？あっそうかまだ起きたばかりだからかな？比企谷小町！正真正銘の、『妹』だよ！」
いろは「えっどういうこと？」

八幡「あれ？やばい俺、正真正銘の妹まで夢にだすとは、我ながら気持ち悪いな」
小町「やっぱりか、お兄ちゃん！これは、夢じゃありません！」
八幡「はへっ？」
小町「だ、か、ら！夢じゃないげんじつです…よ！」
「よ！」と一緒に俺の頬は真っ赤に腫れていた。確かに現実だ。めちゃくちゃ痛てーし！
小町「ね？わかった？小町の愛のビンタ？あっ！小町的にポイント高い!!」
八幡「あっあ～わかった。事情を説明してくれ」
雪乃、結衣、いろは「えっ？さっきから誰？」

俺お兄ちゃんになります！

小町「えっとねぇ～なんて言うかね。っていうか雪乃さんたち聴かれたらちょっと不味いんだけど？お兄ちゃん」

小町ちゃん？一色の特権『上目遣い』だよ！うわっなんかカッコイイ必殺技みたいだな。一色も限れば頑張れば『超電磁砲』と出せそうだもんうん。あっあと俺なら、『独り（ボッチ）』使えるよ！常時発動型だけどね！なんか悲しくなってきたな。そんな事を思っていると

雪乃「あのお兄様？その方は？」

不信感を抱いたのか、細目で睨めつけるそうに小町を見る。

八幡「お前、小町だぞ？俺のいもう…「ちょっと！お兄ちゃんシー」あっあぁ」

結衣「おにい？その人を妹って言いかけなかった？」

八幡「いっいやちげーよほらあの芋屋さんの娘さんほらいただろ誰だっけほら川田さんみたいな名前の！」

結衣「いっいたっけ？」

八幡「とにかくだ！お前らはとぉぉぉい所へ買い物へ行ってくれ！」

雪乃「わっわかりました。行ってきます」
雪乃「では皆いきましょう。お兄様の邪魔をする訳にも行かないし」
いろは「はーい!じゃ行ってくるね!お兄ちゃん!」
小町「この浮気もの、」
小町がボソリと呟くと同時に雪ノ下一行は買い物に行った。
八幡「いっいや小町勘違いされる様な言い方は辞めようね」
小町「まぁいいや!妹キャラを取られたのは、少し寂しいけど、」
八幡「まぁなんだその、ここが現実でも夢でもさほんとの妹は小町、お前だけだ」
小町「うん!ありがとうでもそんな談笑をしている場合じゃないんだよねぇ、まずお兄ちゃんこの記事を見て」
その手渡された、記事を見ると。
「千葉県、総武高校男子生徒1人と女子生徒3人が昏睡状態」という内容が書いていた。
正直めちゃくちゃ驚いて、かつすぐ気づいた。俺たちの事だ。
八幡「なぁ小町もしかして」
小町「そうお兄ちゃん達のこと」
八幡「でもここには『昏睡状態』って」
小町「まぁこれは、ハッタリにしか過ぎないよ。っでここは、何処と思う?」

八幡「まぁ千葉県内ではないな」
何故県内じゃないかと分かるか、それは俺は千葉県内の地図を知っている。暇すぎて、Ｇｏｏｇｌｅマップで千葉って検索したら大体出てくる!･うん!･あっあの嘘です。そうです。ストーキングもどきをやった事があります。はい。「キモッ」とか言わないでね『もどき』だから!!
小町「ほほぅよく分かったね!･流石私のお兄ちゃん!･あっ今の小町的にポイント高い!!」
八幡「はいはい」
小町「で何処かというとここは、日本県内の雪ノ下家の所有地の島だよ」
八幡「ってまさか、あの人も「はろはろ～」ゲッ陽乃さん」
陽乃「あらあら～酷いな～比企谷君ってば～でも!･そういう所も私は好きだぞ!･」
八幡「ハイハイ」
小町「まっまぁ続きなんだけどさ、覚えてる?･あの時の出来事」
その瞬間八幡の脳裏になにかがよぎった。
陽乃「知っている名前のはずだよ、比企谷君『葉山桃矢』の事を」
その時、八幡は強烈な吐き気が襲ってきた。八幡は、薄々分かっていた。アイツの名前が手で来ると。そして、急いでトイレに行き、全てを吐き出す。

陽乃「ごめんなさい比企谷君、急に名前を出して。でも吐いたって事は、もしかして君気づいている?」
八幡「まぁ少しは。あの時は地獄だった」
陽乃「ごめんなさいね。本当に、あれは雪ノ下の失態だったはごめんなさい」
八幡「陽乃さん頭を上げてください、あれは」
陽乃「いえあれは完全に家の責任だわ、ガハマちゃんにいろはちゃんまで巻き込んでしまったわ」
八幡の意識は、『あの時』に遡る。
あれは、7月上旬だった。いつもと変わらずに奉仕部でなんにも考えず、ボーッと本を読んでいた。その時、
???「すいませーん、いらいなんですけど〜」
雪乃「はいえっ、えっとノックをって、」
雪ノ下は、すぐ分かった。両手に拳銃を持っていた。それは雪ノ下の顧問弁護士『葉山桃矢』だ。
桃矢「あの〜少し眠ってくれますかね〜」
比企谷「お前ら誰だ!」
桃矢「あぁ、そう言えば君は隼人のクラスの、比企谷君だっけ〜?ごめんねー巻き込

んじゃって～」

八幡は、少し理解する事に時間が掛かった。５０代半ばだろう。そして、葉山の事を隼人と親しげに

雪乃「葉山さん、何のようですか!?貴方は、雪ノ下の弁護士は辞めたんでしょう！なんで!?お金？弁護士への復職？ならいくらでもします！」

桃矢「ちげーよ!!雪乃ちゃんよー！俺はさ～雪ノ下家には、全力でさ～フォローしてきたんだよ！それをさ、俺の失態ならまだしも雪ノ下の失態を～俺に！この俺に！あぁもぉー!!腹が立ってきた。まずは、お前達眠ってもらから！」

そこから、八幡は覚えてはいなかった。

いや思い出したくはなかった。

小町「お兄ちゃん～！おーい！」

八幡「おっおう、ごめんボーッとしてた」

小町「うんまぁさっきの続きだけど、お兄ちゃん達、雪乃さん、結衣さん、一色さんはある薬を飲まさせてる。麻薬『ＬＯＳＴ』一部の記憶と一部の記憶を暗示させ、記憶ショックを起こす薬」

八幡は、息を飲んだ。

八幡「ということは」

陽乃「そう、雪乃ちゃん達は、完全に比企谷君の事を『兄』として見てるんだ」
八幡「治す薬とかは?」
陽乃「今、雪ノ下と警察庁が急いで開発してる」
八幡「そっそうですか、っでいつ頃完成するんですか?」
陽乃「それがね～3ヶ月後なんだよねぇ～あはは、」
八幡「それ本気で?」
陽乃「うん!!」
八幡「そんな満面の笑みでいわれても、はァ」
陽乃「まぁ雪乃ちゃん達とぉ～ハーレム生活が出来るん　だ・か・ら」
陽乃が耳元で囁く。
八幡「あのなぁ」
陽乃「あっ雪乃ちゃん帰ってきた!じゃあ私達は帰るね～。じゃあお邪魔しました～」
タタタと急いで帰る。
いろは「ただいま～お兄ちゃんー!」
八幡「うをぉ!一色、いきなり抱きつくな!」
いろは「えっえっとすいません、お兄ちゃん嫌だった?」

も～だからこの子は、『上目遣い』を頻繁に使うんじゃないよ。俺のＨＰ無くなっちゃうよ？

八幡「嫌じゃないけど、いきなりはするなよ」

いろは「はっはい!!」

くしゃくしゃと頭を撫でる

すると、

結衣「おにい！もう！いろはだけ！」

八幡「わかったよ、すればいいんだろ」

由比ヶ浜の頭もくしゃくしゃと撫でる

結衣「うんうん！それでいいんだよ～おにい！」

雪乃「お兄様!!」

八幡「ひゃっひゃい」

雪乃「雪乃もお願いしてもよいですか？」

八幡「あっあぁ」

雪ノ下の頭もくしゃくしゃと撫でる。

雪乃「お兄様、私にはなんでも言ってくださいね！」

それは、素の雪ノ下が見れたような気がした。

八幡「あぁお兄ちゃんは、雪乃を頼るよ」
雪乃「はい!!」

妹ってのは、案外いいものだ
雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【前編】

俺は、小町と陽乃さんをあやふやに説明した。
外で雷がゴーゴーと鳴り響く。
そして、部屋に戻り……
八幡「ハハハハハハ……お兄ちゃんだてっ！お兄ちゃんだてっさーー！バッカじゃねぇの！バーカ！バーカ！俺のバーカ！」
小学生かよ……
雪乃「お兄様？大丈夫ですか？」
雪ノ下がドア越しに話しかける。
八幡「あっあぁーあれだ、あのっ材木座と話してたんだよ」
雪乃「材木座さん？お友達ですか？」
八幡「まぁ、そうなもんだ。てか雪ノし、雪乃部屋入れば？」
雪乃「はっはい！入らせて頂きます」
八幡「っでどうしたんだ？」

雪乃「あの、お兄様が不審な喚き声を…」
八幡「そっそうか」
雪乃「あのそれと、雪乃はカミナリがどうにも苦手で…その一緒に寝てもいいですか？」
八幡「ひゃっひょっひょれは（雪乃）「お兄様？」（八幡）いっいや不味くないか？その男女が2人同じ部屋で…（雪乃）「お兄様？雪乃達は兄妹なので、あっ不快でしたか？私の提案は」（八幡）いっいやそうだよな！兄妹だしでも誰にも言うなよ」
雪乃「はい！」
やばい、やばい、やばい！どうしよう！絶対なんか言われる。でも！ゆきのんの提案だしね☆
やべぇ～キャラ崩壊だ。冷静になれ、比企谷八幡今は、兄妹、妹なんだ！よし大丈夫！
八幡「じゃっじゃあ、俺は床で寝るから」
俺が言った瞬間服を少し引っ張った。
八幡「んっ？なんだ？」
雪乃「あの、雪乃はベットで…お兄様と寝たいです…」
八幡「はぁ、わかった。今回だけだぞ」

雪乃「はっはい!!」
っべわー。まじやべーわー。あれキャラ崩壊だ
落ち着け比企谷八幡、冷静になれ、俺よし
この幻想をブチ壊そう!はぁ、不幸だー!!
やめよ。
八幡「なっなら、おれは外側で寝るから」
雪乃「はい」
しーんっとしてる。想像以上にしーんっと。
あーっ。喉乾いた。あれっ動けない。
振り返ったら
雪乃「うぅぅ……」
八幡「どうしたんだ?」
雪乃「あのっヒッ!コッ怖い。うぅぅ……」
何この生物可愛い。こんなデレのん間違って……いないな!!
雪乃「お兄様〜頭撫でてくださっヒッ」
八幡「あぁ、ヨシヨシ」
雪乃「ありがとうございます。お兄様、今だけでいいのですが、お兄ちゃん…と呼ん

でいいですか？」
八幡「あぁ、ヨシヨシいいぞ」
雪乃「うぅぅ…ありがとうね。お兄ちゃん」
なんなのこの子やばい襲っちゃいそうだ。
あの嘘です。そんな度胸は八幡にはありまーーーーーせん！やめよ。
八幡「なんだその明日埋め合わせ、するか」
雪乃「はい！雪乃は楽しみです！」
眠れん!!
翌朝
何かが俺の上に乗っている。重くはないが寝がいりができない。
八幡「はぁ、んっふぅ」
結衣「おにい！雪乃お姉ちゃんとなんで寝てるの!?」
八幡「ハチマンヨクワカンナイナー」
結衣「お・に・い！」
八幡「わかったよ、雪乃がカミナリが怖くて一緒に寝たいって言うから」
結衣「いや、それはまだわかるよ!?でもさ、一緒のベットで寝ることはないでしょう？」ギロッ

八幡「なっなぁ雪ノし、雪乃なんか言ってくれよ」
眠っている雪ノ下を起こそうとした時、
雪乃「んっお兄様やめ…て」
結衣「へぇ～おにいはー？これでも何か言うと？」ギロッ
八幡「いえ、なんにもありましぇん」
一色と由比ヶ浜から色々と言われた。
正直あんま聞いて無かったけどな。
でも由比ヶ浜さん、ちょっと怖い。
雪乃「フフ……お兄様」
雪ノ下は眠りながら、声を漏らす。

雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【後編】

雪乃「んっうぅお兄様？どうしました？そんなにションボリして」
八幡「いっいやなんでもない」
お兄様は、なにか私に隠している。でもお兄様が話したい時に話せばいいと思う。
なにかお兄様の背中には、無性に抱きつきたくなる。少しなら…ね？
八幡「ヒッなっなんだ？どうしたんだ？」
雪乃「おおおおおお兄様？元気がないようですたい、雪乃が慰めて上げますけどしますたい」
八幡「おい、日本語になってないぞ！別に元気がない訳じゃないから、っな？慣れてないことするな」
雪乃「すいません、お兄様」ショボン
八幡「ヨシヨシ大丈夫だ、お前の兄貴はこのぐらいでへこたれない」
結衣「お・に・い？まーたー！」
八幡「ヒィィィーーーーーーー」
その後、由比ヶ浜と一色にまた説教された。

なんかペチャクチャと喋っているが内容が全然入らない。
雪乃「結衣？お兄様に私がして欲しいと言ってしてくださったの、お兄様に責任はないわ」
結衣、いろは「そっそこまで言うなら」
雪乃「お兄様？雪乃は、着替えたいのですが」
八幡「あっあ～出ていくよ」
あれ？俺の部屋じゃないか？まぁいいか幸い本はコッソリ持ってきたし。
ゴソゴソとドア越しから雪ノ下、由比ヶ浜、一色の連中の声がする。
なんだか、覗きをしている気分だ。
雪乃「ちょっちょっとやめなさい！」
結衣、いろは「よいではないか～」フフッ
雪乃「ちょっちょっと！」
その瞬間、俺の背中は真っ逆さま、見上げた先には、縞パンあれ？だれの？そう！雪ノ下！ってーーーーー！
雪乃「お兄様～!!」ギロッ
八幡「ヒッヒィィィー！」
それから、雪ノ下にも色々言われた。

ペチャクチャ赤らめて、はぁとため息を着きながら
雪乃「まぁ、これはそこの結衣といろはのせいでもありますしね？」ギロッ
結衣、いろは「」ヒッ
雪乃「まぁいいです。もう済んだことは、でも、そんなに雪乃の下着姿が見たいのであれば」ボソッ
八幡「んっ何か言ったか？」
雪乃「いっいえなんでも…お兄様のバカ」ボソッ
あれ？バカってだけハッキリ聞こえたよ!?八幡傷ついちゃう！
八幡「まぁなんだその、お詫びと言うか、服、買いに行くか？」
雪乃「いいのですか!?」
八幡「まぁ暇だしな」
雪乃「ありがとうございます！ならすぐ支度を！」
タタタと階段を上り準備をしている。
何であんなに嬉しそうなんだよ。ただの買い物なのに、
雪乃「おっお兄様？この服は雪乃に似合っているでしょうか？」
うっ上目遣いやめろ!!
お兄ちゃん間違え惚れて告って振られちゃう!!いや振られちゃうのかよ…

八幡「あっあぁ似合ってるよ」
雪乃「では、行きましょうか。結衣～いろはも～戸締りして置いてねぇ～」
結衣、いろは「はーい!!」
ドアを開けて、から１５分ほど歩いたら、見たこともない豪華な街、という感じが初めて見る人の感想なのだろう。
八幡「雪ノ下家って一体……」
雪乃「雪ノ下??」
八幡「あっいやいやなんでもない」
ふぅ、良かった。ちびまる子ちゃんのナレーションばりに『って一体…』を使っちまったよ！なにいってんだ俺。
しかし、本当にあの家の総資産ってどのくらいあるんだよ。島を買い取って、デパート、駐車場、ガソリンスタンドまでいや、っていうか俺たちの他に誰か住んでるのか？そういう疑問が直ぐに出てきた。
雪乃「お兄様？どうしましたか？雪乃と居るのはそんなにつまらないでしょうか？」
八幡「いや違う違う。考え事をしていてだな。決して、つまらなくないぞ！」
雪乃「は、はい」
しばらく沈黙が続く……

雪乃、八幡「あの」」
八幡「えっえっと、雪乃からいいぞ」
雪乃「で、ではお兄様、手を繋いでもいいですか？」
上目遣いやめろ、惚れちゃうだろ。
まぁ別に～～俺達は『兄妹』だしね？セーフだよ！多分…
八幡「ひやっひゃい」
雪乃「で、では」
また、しばらく沈黙が続く
どこからか、定員の呼びかけが聞こえる。
店員Ａ「そこのお客様～カップル割で１０００円ＯＦＦ！」
雪乃「お兄様、私達ってカップルに見えるんでしょう？」
八幡「そっそうかもな」
雪乃「あの、あそこによって良いですか？」
八幡「おっおう」
雪ノ下が指を指したのは、如何にもっという洒落た雑貨屋だった。
雪乃「わぁ～可愛い～」
雪ノ下が見ていたのは、可愛らしいピンキーリングだった。

八幡「なんだその、欲しいのか？」
雪乃「い、いえそんなつもりは、」オドオド
八幡「いいよ、これ欲しいんだろ？」
雪乃「で、でも」
八幡「いいんだよ、こういう時には男のプライドがあるんだよ」
レジにいって、値段を見たら1桁間違ってるんじゃないかというレシートだった。
雪乃「ありがとうございます！」
八幡「別にいいよ。埋め合わせだ、これぐらいはしないとな」
雪乃「わぁ～ありがとうございます」
ピンキーリングを雪ノ下に渡すと、右手の人差し指にはめた。
八幡「どうだ？」
雪乃「はい！ピッタリです！お兄様、ありがとうございます！」
八幡「そうか、なら良かったよ。もう暗くなってきたし帰るか」
雪乃「はい！」
しばらく歩き、家に着いた。
八幡「ただいま～」
いろは「もう！遅い！お兄ちゃん！」

プクっと膨れた頬を俺に向けあざとく言った。
八幡「悪い悪い」
そう言いながら、一色の頭を撫でる。
いろは「そうそう、それでいいんだよ～」フフッ
雪乃「さぁ夕食の準備しないと」
いろは「雪乃お姉ちゃん、もう大丈夫！今日は、いろはが作ったのです～！さぁさぁ、ゆっくりしてて下さい！」
一色が雪ノ下の背中を押しながら二階に押し返す。
八幡「なら、俺も少し寝るか」
俺は直ぐに部屋に戻って、ベットで寝た。
コンコンとなるドア。
雪乃「お兄様？入ってよろしいでしょうか？」
八幡「んっふぅ」
雪乃「フフッお兄様たらっまだ寝てらっしゃるのね」
俺の頭が浮く。そして意識が戻り、この状況が直ぐにわかった。
雪ノ下に、膝枕されてる！
雪乃「もう、お兄様は」

膝枕されながら、子守唄を歌われる。
また、眠気が襲ってくる、
八幡「ふぁ～」
雪乃「お兄様？起きましたか？」
八幡「あっあーって」
２人の顔が赤らめてくる。
その理由は子守唄を歌いながら俺の手が雪ノ下の胸に直で当たっていたから。
その後、由比ヶ浜と一色に散々言われた。

こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【前編】

ふぅ、なにかが俺の下半身に乗っている。
知っている、この程よく甘い匂いを。
結衣「おにい！起きてよぉ～」
八幡「お前なぁ、毎日毎日、俺の囁かな楽しみを壊さないでくれない？」
結衣「あっ起きた起きた～、ヨシヨシ」
八幡「はぁ、っで？なに？何しに来たの？」
結衣「えっ、えーっとねぇ～」
八幡「さては、人の眠りを！邪魔しに！来たのか！」
知っている、由比ヶ浜は、押され弱いと。
結衣「うううう」グスン
八幡「まぁいい、でもな？休日ぐらいゆっくりさせてくれ、なっ？」ヨシヨシ
結衣「わかった～」

八幡「」ヒッ
知っている、この感触を、由比ヶ浜のたわわの様な胸だ割れながらこれには弱い。
結衣「許してくれる？」
やめろ！『上目遣い』は！それは、旧一色の伝家の宝刀だぞ！
八幡「わかったならよし！」ナデナデ
いろは「お兄ちゃん？何してるのかな？早く降りてこようね？」
一色さん？なにか燃えてます！後ろから！家事ですよー！助けて誰か～
一色に連れられて、一階に降りた。
結衣「もう、おにいたらっ～」
あーだこーだ言いながら、俺の寝癖を直す。
八幡「あーもう、いいよ！」
結衣「まぁまぁ、遠慮せずに～」
八幡「はぁ、」
こいつは本当に、今の由比ヶ浜は、お姉さんぶりたいんだろう、いわゆるゆきのん化だ。
はぁ、まぁこいつがやりたいんならまぁいいや。
鼻歌を歌いながら、寝癖を直す。

結衣「ンフフ……」
八幡「はぁ、」
結衣「あっ、ため息ついたー！」
八幡「いやため息じゃなくてだなぁ、はぁ、」
結衣「あー！また！わかった！ならさそのお詫びに、その、結衣の頭を撫でてもいいよ？」
由比ヶ浜が恥じらいながら言い放った。
八幡「いやいや、なんでそうなるんだよ」
結衣「あーもう！いいじゃん！」
八幡「わかったよ」ヨシヨシ
結衣「うんうん、それでいいんだよ！」
ふと、我に返る。何をしている。
比企谷八幡、お前だけなんだよ！あの真実って奴を知ってるのは、お前だけなんだよ……記憶があるのは……
結衣「おにい！どうしたの？ボーッとして～」
八幡「すまんすまん、ちょっとな」
気が付いた時には、雪ノ下と由比ヶ浜、それに一色がいる、奉仕部の姿が垣間見れた。

いろは「お兄ちゃん～おーい！」
雪乃「お兄様？熱でも？」
八幡「いっいや、大丈夫だ」
結衣「あの…さ、おにい今日暇でしょ？」
八幡「あっ、あぁ暇だけど？」
結衣「その、結衣とさ、デートして！」
八幡「あっあぁ、いいけど」
いろは「あーずるーいー！」
雪乃「こら、いろは食事中よ？」
いろは「はっはい……」
雪ノ下さん！尊敬ッス！……でも、今は…こいつらの思いを叶えてやることしか出来ないしな……
八幡「っで？デートって何処でするんだよ」
結衣「えーっと…此処とかどうかな？」
八幡「はっ？家でか？」
結衣「うんそう…だめ？…かな？」
八幡「いっいや、いいけど楽しいのか？」

これはいわゆる、お家デートなのだろう…なんか普通に言ったら恥ずかしいな。

結衣「フフフッ」

由比ヶ浜の不敵な笑みが表情からでる。

こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【後編】

八幡「っで？なんでこうなった？」

今、俺の状況は、いわゆる修羅場である。

睨む雪ノ下、ニタニタと笑う一色…殺意ってやつだね？

そして、しまいには由比ヶ浜ときたら、今俺の右手を掴んで離さない、困った子だ

結衣「ふふーん」

何勝ち誇ってんの？こいつは本当に…

八幡「なっなぁトランプでもするきぁ」

思わず声が裏返った。恥ずいやべーーー！恥ずいめちゃ恥ずい……こうして俺の黒歴史のページの1枚になるのだ。ハハハハハハ……

結衣「結衣はいやぁ～だって～今日は～、結衣とぉおにいとのデートだもん！」

雪乃「まぁ、しょうがないわね。あっあと襲ったら？どうなるかわかりますよね？お兄様」

八幡「わわわ…かってるよ」

雪乃「いろは、行きますよ」
いろは「ではでは～、お二人共ごっゆっくり～」
しばらくの沈黙…なんなんだよこの感じ、息苦しいなぁ～ホント。
結衣「あっ、あのさおにいの事さ、八幡って呼んでいい？／／／／／」
八幡「あっあぁ、」
結衣「八幡？」
八幡「ひゃい！」
思わず出ちまったよ！てか何故、疑問系？
結衣「八幡！」
八幡「あぁ」
結衣「八幡ねぇ～八幡～」
なんなのこの子は、本当に馬鹿の一つ覚えみたいにはぁ、まぁこれも由比ヶ浜らしいと言えばそうなのかもしれんな。
八幡「なんだよ」
結衣「いや、呼んでみただけなよぉ～」
なっなに！めぐりんパワーが滲み手でいるだと！コイツ…やるな！馬鹿なのか俺は…

八幡「そっそうか…」
結衣「あっそうだ！ならさ、結衣って呼んで？」
八幡「いや、呼んでるだろいつも」
結衣「そっ、そっか。むむっ」
八幡「ところで、結衣は何したいんだ？」
結衣「だから、お家デート」
八幡「いや、お前がこのままでいいならいいけどよ、いつもこんな感じだよな？」
結衣「そっそういえば！そうだ……」
うーん、この子は、本当にアホな子だ。由比ヶ浜は、ふと思いついたように立ち上がる。
結衣「そっそうだ！おままごとしようよ！」
八幡「はっ？この歳で？」
結衣「いっ、いいから早くしよ！／／／／／」
無理やり、台所に連れてゆかれる。あっあれ、なんか忘れた。そうだ、あの由比ヶ浜に調理台に立たせてはいけない暗黙のルールがあるだった！どんだけなんだよ……
ふふーんと鼻歌を歌いながら厨房に立つ。
八幡「おっおい！」

結衣「んっ？なに？」
八幡「俺が作るから、あっちでゆっくりしててくれれ！いやしてください！」
結衣「えっ？なんで？」
八幡「いや最近の日本文化に習って、男の人が立った方が、スピーディーでハイリターンでノーリスク出切り抜けられるだろ？その、コスパも男の方がざっくりしてて、コスト軽減にもなるしな？」
結衣「言ってることはよく分かんないけど、わかった！」
あー良かった～ホント、てか俺の言動矛盾してないか？まぁ、いいやどっかの玉なんとかさんみたいだったな、いや今回限りでは、玉なんとかさんには救われたな、ありがとう！玉なんとかさん！元気で！なんか、死んだみたいだな。
さて、何を作ろうか。
うーん、朝飯だ目玉焼きが王道ちゃ王道か。
目玉焼きに諦めが着いたのか、着々と2人分を作っていく。
結衣「えいっ」
八幡「えーっい、鬱陶しい！「きゃっ」あっすまん、ごめん強くやり過ぎた」
八幡が強く手を振ってしまい、結衣がフローリングに倒れ込んでしまう。
結衣「ぐすん」

八幡「いや、本当にすまん！」

思わず土下座してしまう。これで君も、社畜スキルをマスターしたね！脳内思考の中でこれだけ取り乱してしまうほど動揺してしまうとは…

結衣「ちがうちがうの。私がね泣いてるのは…その、八幡はさ私の事嫌い？」

八幡「えっ、なんで？」

思わず質問されてんのに質問で返してしまう。彼女から出た言葉は、あまりに彼女らしくなかったのだ。

結衣「だって…いつも結衣といる時は悲しそうにしてるんだもん」

何かが八幡の中で刺さった。それは、確信的にそして八幡にとっては致命傷であった。

八幡「いやいやそんな事ないぞ。俺は別に」

結衣「なら、結衣の顔ちゃんと見れる？私だけじゃない、雪乃お姉ちゃんもいろはも見れる？」

八幡「それは…」

分かっていた。

まだ俺には、あいつ達に引け目を感じている。兄妹じゃない俺は奉仕部として、同級生として後輩としてあいつ達を見てしまう。

結衣「ねぇ…八幡？何か隠してるでしょ？」
八幡「いや…別に」
我ながら自分を軽蔑してしまっている。なんだよ「別に」って関係が無いように。まるで俺は被害者の様じゃないか。違う知っている今俺は…『加害者』なのだから
結衣「ちゃんと見て！」
八幡「ひっ！」
結衣「おにい、私ねお願いがあります」
八幡「あっあぁ、俺に出来ることなら」
それまでの結衣の表情とは一変し、真剣に見つめられていた。
結衣「秘密教えて？」
八幡「分かった」
分かっていた。その事実は隠しきれない事だと。俺は全てを話した。奉仕部の事も、本当は俺達は兄妹ではなくただのクラスメイトであり、部活部員であると。
結衣「はぁ…そうだったんだ」
八幡「なんていうか、騙したみたいですまん！」
結衣「大丈夫だよ。顔を上げて？ちょっとはビックリしたけどでも秘密を知ったらさ。矛盾が全部合致してるから信じるよ！」

八幡「許して…くれるのか？」
結衣「もちろん!!」
八幡「由比ヶ浜…らしいな」
結衣「私らしいか…あんまり実感わかないなぁ～。あっ！そう言えばさ私って、おにいの事なんて呼んでた？」
八幡「えっ、えーっとな比企谷さんだよ！そう！比企谷さん。うん比企谷最高！」
結衣「ちゃんと顔見る！」
八幡「ひっ！」
結衣「うそ？」
八幡「えっと…」
結衣「目をそらさない！」
八幡「ひゃい！」
結衣「って？本当は？」
八幡「ヒッキーって呼んでました」
見事に見破られたぜ！流石がハマさん！尊敬ッス！
結衣「ヒッキーかぁ。ヒッキーね！ヒッキー！」
八幡「あっあぁ、なんだよ」

結衣「じゃあさ、私２人でいる時はヒッキーって呼んでいい？」
八幡「まぁ、いいけど」
結衣「やったー！ヒッキー大好き！」
八幡「うっうぅ近い近い」
ヒッキーって呼ばれると余計意識してしまうし、唯でさえこの立派なものからの意識を遠のかせるのに必死なのに。
結衣「じゃあさ、これは私たちだけの秘密ね？」
八幡「あぁ、そうなるな」
結衣「はい！じぁ指切りしよ！」
八幡「まぁいいけど」
この後、指切りをした。それは、奉仕部にいた頃より由比ヶ浜結衣との距離が縮まった気がした。
でもなりより、由比ヶ浜結衣の笑顔見れて幸せだった。